●6月選評

小島なお

・大橋　弘典（群馬県）

炎天かち割り
国語の丘に
呼びかけて

その丘は、国語の歴史であり遺跡でもある。地上から呼びかける程度のことではびくともしない。いっそ高天原のあった場所から太古の声で。

・まちりこ（埼玉県）

何枚も重ねたお皿を手に持って
純文学をあきらめている

飲食のための皿を重ねることが日々を暮らすことになる。自分の、誰かの皿を持って塞がった両手は、芸術とは限りなく遠い場所で老いてゆく。

・スズキセーホン（千葉県）

二個二枚いつも二だった日用が
一になって無花果の実

二人暮らしだった生活が、やがて一人暮らしへ。一人暮らしだった生活が、やがて終わる。花が無くとも、無花果の実は甘く重たく実る。

・山本　欠伸（兵庫県）

正しく眼を開いて
月を耕す
もう新しい

物はいらない

私たちの新しい土地、月。新しい物を手に入れ続けてきた地球時代を経て、正しく開いた眼はどのような悔いの風景を回想しているのか。

・Flim（神奈川県）

天気雨の一粒呑めば
さやさやと
光の風鈴めくのどちんこ

空に口を開ければ、のどちんこに雨粒が当たる。さやさやと鳴るその音は、からだのなかに風鈴を吊るしているようで、自分が一個の風鈴になったようで。

・日下部　友奏（群馬県）

食用の砂浜としてダックワーズ

囓ったところからたちまち崩れてしまうダックワーズ。個包装の小さな砂浜をたいらげてゆくとき、ほろほろとこぼれ落ちてゆく懐かしいものたち。

・晴　花（千葉県）

夏の装い
自力のスローモーション

夏の装いをすることで夏になるのなら、夏服を着ているあいだはずっと夏でいられる算段だ。自力で季節を引き延ばすささやかな抵抗。

・現人（東京都）

電灯までの導線

箱ティッシュを踏んづける

灯りを付けるまでの決まりきった日々の動線。と、油断していると地雷を踏むことになる。動線はいつか導線にすり替わっている。

・杉本　太（北海道）

デパートで買った財布を高らかに
万緑見捨て釜飯ほぐす

お金のかからない初夏の万緑より、お金のかかる財布や釜飯が満足させてくれる時間がある。万緑に見捨てられてでも。

・羊夏生（北海道）

朝一番に教室へ

部屋いっぱいに大きな薬指

その朝はじめて教室に入った生徒にしか見られない光景がある。無人の部屋に出現した大きな薬指で、なにを癒し、なにを約束するかは自由だ。